

ジェンダーをめぐるコミュニケーション齟齬の研究（4）

——FtX の生きがたさからみる相互行為秩序の特性——

千葉大学 鶴田幸恵

1 目的

この報告の目的は、「人が男か女であるとわかる」という秩序が、単にそのつどの相互行為に関わっているのではなくて、それが成立していなければそもそもそのつどの相互行為に入っていないような背景的な秩序であり、かつそうであるがゆえに主題化されずに維持されなければならないような秩序であることを示すことである。

2 方法

そこで、データとして、FtX および性別の外見を移行中の FtM へのインタビュー・データを用いる。

まず、2007年3月から5月にかけて、2人の FtX、男性ホルモン投与や乳房切除術などの身体的「治療」をするつもりのない1人の FtM にインタビューを行った。また2010年1月から3月に、生物学的な女性から男性に、あるいはそうではないものに、トランスを行おうとしている／行っているさまざまな立ち位置の人びと13人にインタビューを行った。インタビューは、半構造化されたものであり、かかった時間は平均2時間である。なお、2011年11月に、一人については追跡調査を行った。分析する断片は、それらのインタビューを文字起こししたものからの抜粋である。全体的にコミュニティのなかでのつながりが、かつてより薄れているとはいえ、個人が特定できないように、断片で語られている以上の情報は載せない。あえて述べておくと、対象者が20代から30代の比較的若い層であるということだろうか。また、FtM か FtX かアイデンティティが揺らいでいる人、あるいは性ホルモン投与や乳房切除などの身体的「治療」をするかどうか、迷っている人も多かった。

3 結果

分析の結果、わかったことが三つある。一つは、女に対しては女として振る舞い、女だと思われている方も女として振る舞い返し、男に対しては男として振る舞い、男だと思われている方も男として振る舞い返している、という現実である。男は男としての振る舞いを女は女としての振る舞いを自分自身もし、他者にも求めるという振る舞いの相互行為秩序があることがわかる。

二つ目は、女か男かという判断をしかねるという状況もありうることである。そのような状況では、判断される当の本人は、相互行為秩序の違背を犯され、非常に嫌な思いをする。どちらかだと判断されても、振る舞いを合わせさせられる。

三つ目は、相手を女だと思うか男だと思うかは、知っているか知っていないか次第であり、さらに見る人次第であることである。そして、いったんどちらかだと判断すると、判断された側は、その判断に合わせて振る舞わされることになる。だからこそ、FtX は生きがたいのだ。

4 結論

以上から、ひとくちに相互行為といっても、複数の水準があり、なかには、それが成立していなければ他の水準の相互行為が滞るような、そういう水準の秩序がある。「性別がわかる」というのはそういう秩序であると、結論づける。